

PAC 分析を日本語非母語話者に日本語で実施する際の留意点

— タイ人新人日本語教師への PAC 分析から —

小澤伊久美・嶽肩志江・坪根由香里・八田直美

[要 旨]

本稿では、タイ人新人日本語教師 2 名を対象にして、日本語で実施した個人別態度構造 (Personal Attitude Construct: PAC) 分析について、インタビューの仕方に焦点をあてて考察した。分析の結果、インタビュアーや通訳者がどのようにインタビュー場面に臨んだかが、調査協力者の語りのありように影響を与えていることを明らかにした。具体的には、インタビュアーの調査協力者への問いかけ方の影響の他、通訳者を同席させること自体が協力者に安心感を与えて語りやすくなる可能性などを指摘した。また、調査協力者の語りを解釈する際には、語りの背景にある母語の影響や社会的文脈との関係についても理解すること、通訳者の訳し方は意識になっていないかを検証することなどの留意点を挙げた。PAC 分析ではインタビュアーはできるだけ協力者の発話を引き出すことに専念し、自らの語りを控えることになっているために、協力者の語りのみが分析対象になりがちである。本研究の成果は、PAC 分析であっても、インタビューの構成員全員の発話を分析の対象とする必要性を示唆したと言える。また、それは、非母語話者を対象にして外国語で実施した PAC 分析に限らず、PAC 分析を活用する者全員が念頭におくべきことだと言えよう。

[キーワード]

日本語非母語話者、PAC 分析、インタビューの仕方、通訳、留意点

1. はじめに

教師や学習者のビリーフを解明する研究で活用される手法の一つに、社会心理学と臨床心理学の知見を持つ内藤 (2002) が開発した個人別態度構造 (Personal Attitude Construct: PAC) 分析がある。PAC 分析では、まず、調査協力者 (以下、協力者) に、ある刺激に関して自由連想をさせ、そこで得られた連想語同士の類似度を評定させた結果をクラスター分析にかけてデンドログラム (樹形図) を作成する。そして、そのデンドログラムを元にクラスター構造のイメージや解釈を協力者に尋ねるインタビューを実施し、インタビュー終了後には調査者による総合的解釈をすることで、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する。

内藤は、PAC 分析を適用する際の限定条件の一つとして、協力者が自由連想を表現したり報告したりする能力を挙げており、イメージ喚起能力や言語的能力の低い場合には、調査者が絵カードや物品を提示して選択させるなどの工夫が必要であるとしている (内藤 2002: 28)。このことを考慮した場合、母語で実施することが望ましいことになり、安他 (2004) でも韓国人の協力者に対して、PAC 分析の全ての過程を韓国語で実施している。但し、内藤は、外国語で実施する PAC 分析を否定しているわけではない。例えば、来日した留学生に対する異文化間カウンセリングにおいて、連想語は母語で書き出し、インタ

ビューは外国語で実施した井上・伊藤（1997）に言及し、「留学先の国語の習得が不十分な段階では、母語による連想項目によって構成された構造の方が、カウンセラーへの報告は（筆者注：外国語であるため）同じくたどたどしいとしても、被験者自身が内界を自在に探索するのには障碍がない」（内藤 2002：42）と指摘している。

一方、日本語教育では、日本語を母語としない協力者に対して日本語で PAC 分析を実施している研究が少なくない（横林 2005、藤田 2007、丸山・小澤 2011、他）。これらの研究では、使用言語が母語ではないことが特に問題にはならなかったとされている。筆者らも、日本語を母語としない日本語教師（以下、NNT）のビリーフに関する一連の研究（坪根他 2010、他）で PAC 分析を用いているが、これらの先行研究を受けて使用言語は基本的には日本語とした。但し、パイロット調査（坪根・八田 2009）での気づきを踏まえて、辞書や通訳の利用を認めるなど、いくつかの変更を加えている。

このような背景から、本稿では、日本語能力が十分ではない NNT に対する PAC 分析のナラティブ・データを分析し、日本語で実施する場合、インタビューの仕方や通訳の活用が、どのように語りに影響を与えるかを考察する。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

日本語が母語ではない協力者に対して日本語で PAC 分析を実施した際に使用言語がどのような影響を与えたかを論じた研究は、筆者らの知る限り、横林（2005）、藤田（2007）、坪根・八田（2009）のみである。

横林（2005）は、一般に留学生の日本語能力が高くない場合には面接調査のような質的調査の実施が困難であるということを背景に、PAC 分析を用いた場合には日本語力が低い留学生からも質の高い情報を得ることが可能かどうかを論じたもので、先行研究の中では一番詳しくこの観点について論じている。

取り上げられている事例は、台湾から来日した、日本語学習歴のない短期交換留学生 1 名に対する PAC 分析で、来日後 5 ヶ月目の初級終了段階と 8 ヶ月半になった時点の二度にわたって「日本語の勉強」「日本や日本人」「自分の国や自分の国の人」「日本での大学留学生活」に関してどんなイメージを持っているかについて調査したものである。この事例では、刺激は日本語で与えられ、自由連想の段階では、イメージは単語・文・絵のいずれで挙げてよく、その解釈などの段階でも協力者は自分の希望する言語で語ってよいという形が取られている。結果として、初回の調査では連想項目の多くが中国語や日中混淆の表現で記され、二回目は母語の影響が見られる表現が観察されたものの全てが日本語であったという。また、イメージの説明の部分では主として日本語が使用され、補助として中国語、英単語が用いられていたこと、初回のインタビューにおいてもデンドログラムを見ながら説明をすることで言語のみの面接より多くの情報を得ることができたこと、初回よりも二回目のほうが日本語使用の割合が増えていることを報告している⁽¹⁾。この事例を踏まえて横林（2005）は、PAC 分析では、協力者自身の自由連想を活用するため協力者自身の問題意識に基づいてインタビューが進むこと、デンドログラムを見ながら話せることから、日本語力が低い協力者であっても、表現は拙いながらも、協力者自身の言葉で深い解釈や説明をすることができているとしている。

藤田（2007）は、日本語中級前半から後半レベルの短期留学生 3 名⁽²⁾ に対し、「日本語

で書く」という言葉から連想されるイメージについて PAC 分析を実施したものである。使用言語は日本語でも英語でもよいとしたが、実際には、表現が難しい場合を除いて日本語が使われたという。藤田は、3名についての分析を踏まえて、「PAC 分析では調査協力者自身の言葉が視覚的に提示されるため、調査協力者は自己の内面を説明しやすく、内面について語ることへの抵抗感もあまり感じないようである」と述べ、インタビューで使われる言語の能力が高くない協力者にも PAC 分析は実施可能であるとしている（藤田 2007：95）。

横林（2005）や藤田（2007）の研究は日本語学習者に対する調査に基づいた考察であったが、坪根・八田（2009）は日本語教師に対する調査について論じている。また、協力者の日本語力も上級で、先行研究の中では最も高い。具体的には、中国人日本語教師 1 名（日本語教師歴 15 年）、タイ人日本語教師 1 名（日本語教師歴 10 年）に対して、「いい日本語教師」のイメージを問う PAC 分析調査を事例として取り上げたものである。坪根・八田（2009）では、「具体的なエピソードなどを話していくうちに、その連想語を書いた理由、その時の気持ちなど、自分の考え方がはっきりする」といった、インタビュー後の協力者の感想も踏まえた上で、NNT に対する PAC 分析を実施する際には以下のような問題が生じる可能性があることが指摘されている。

- 1) 日本語能力が十分でないことから、言いたいことが全ては言えない。
- 2) 母語でない言語で長時間集中することは、協力者にかなりの負担になる。
- 3) 色・感覚・場所等を使ってイメージを語ってもらう場合、言語文化によってイメージが表すものが異なる場合がある。
- 4) 協力者にとって、クラスターの名付けが難しい。
- 5) 調査者の質問が理解できても、自分の答が質問に合ったものか自信が持てないと協力者が感じてしまう。

そして、坪根・八田（2009）はこれらの問題が生じるのを避けるために、通訳や辞書の使用を検討する、できるだけ協力者本人に意味するところを説明してもらう、休憩を挟むなどの対応を提案している。

母語話者に対する PAC 分析のインタビュー技術については、内藤他（2010）の議論がある。まず、内藤は、PAC 分析の実施者に見落とされがちなこととして、協力者の内面探索を促す PAC 分析の特徴が、連想語を自由連想で書き出すことやデンドログラムを見ながら語らせることだけでなく、次のようなインタビュー技術にも支えられていることを指摘している（内藤他 2010：13-15）。

- 1) 協力者が長期記憶にアクセスしたり、エピソード全体のイメージ想起や記憶から蘇る感情を喚起したりすることを可能にするために、インタビュアーは十分に時間をかける。
- 2) 連想語の読み上げの速度や抑揚、準言語の活用、協力者がイメージ喚起や探索をするスピードや間に合わせることで、論理的情報処理から感覚を喚起し、感情に浸る処理への転換を促す。

このことは具体的には、インタビュアーが協力者の語りを反復しながらゆっくりと話を聞くという行為として具現化される。また、内藤は、協力者の発話を促すためのアイコンタクトやあいづち、インタビュアーの意思の表明などを徹底して排除している（内藤他

2010:19-20)。しかし、このようなインタビュー技術について、その有効性は認めるものの、日常的なコミュニケーションとはテンポもやりとりの特徴もかなり違っているため、それが協力者に合うかどうかによって PAC 分析の成否も変わってくるのではないかという指摘もある（前掲 16）。

このように考えると、PAC 分析は、連想語を挙げる段階においてもインタビュー部分においても、協力者がイメージを喚起し、それについて語るという課題をどれだけ遂行できるかが、分析の成否を左右する大きな要因であると言える。さらに、課題遂行への影響を考える時、日本語が母語ではない協力者を対象とした場合は、「外国語副作用」の問題も考えなければならない。外国語副作用とは、不慣れな外国語を使用する際、イメージを喚起したり内省したりするための思考力そのものが一時的に低下してしまうというものである（高野 2002：22）。但し、その外国語を使う能力が高ければ高いほど、思考力低下が抑えられることを示唆する研究結果が出ているということである（前掲 26）。

調査者とは異なる言語を母語とする協力者に対して PAC 分析を実施する場合、協力者が課題を遂行しやすい形として、安他（2004）のように、協力者の母語の運用力が高い調査者が協力者の母語を用いて実施するのが一つの方法であろう。しかし、研究課題の持つ制約や調査者側の言語能力などの制約から、それ以外の方法を探らざるを得ない状況もある。その場合、協力者が課題を遂行しやすくするために、調査者が取り得る措置について検討することが重要になる。

筆者らは、教師研修に参加した影響を考察する目的からタイ人新人⁽³⁾ NNT3 名に対して PAC 分析を実施している（八田他 2011、2012）が、外国語での実施であることへの配慮として、希望者には通訳をつける、連想語を書く際には辞書の使用を認めるなどの手立てを講じている。結果として 3 名とも通訳を希望したが、通訳者を介した PAC 分析については、これまでに議論されたことがなかった。そこで、本稿ではこのデータを八田他（2011、2012）とは着眼点を変えて分析し、日本語が母語ではない協力者を対象とした場合のインタビューの仕方について、通訳者を交えた場合の留意点も含め、検証することにした。

3. 調査の概要

3.1. 方法

分析対象は、主としてインタビュー部分の語りで、具体的には、協力者の承諾のもとに録音した音声データ、その逐語書き起こしデータ、通訳された部分の内容を調査当日とは別の通訳者に確認してもらったデータ、調査当時に調査者が観察した協力者の非言語的行動などについてのメモである。これらのデータを、①日本語の使用、②通訳者の存在、③インタビュアーの発話の 3 点がどのようにインタビューに影響を与えているかという観点から質的に分析した。

3.2. 協力者

筆者らの調査で通訳を希望したタイ人新人 NNT 3 名のうち、八田他（2011、2012）でビリーフや研修から受けた影響などについて分析結果を発表している 2 名（以下、A、B）への PAC 分析を本稿の分析対象とした。

2 人はタイの大学で教えるタイ人新人 NNT で、共に 1 回目の PAC 分析時に日本語教育

歴1年未満である。2人は、出身大学は異なるが、主専攻として日本語を学び、同じ大学に就職した。ただし、異なる学部に所属している。この大学では、日本語は主専攻ではないが必修科目として教えられている。

Aは20代前半で、訪日経験はない。日本語能力試験の合格状況と会話力から、調査開始時点での日本語力は中級前半であると判断した。Bは、20代後半で、1年間の日本留学経験がある。調査開始時の日本語力は中級後半であると判断した。なお、PAC分析とはどのようなものかは、両名とも本調査に協力するまで知らなかった。

3.3. 本研究における PAC 分析の手続き

内藤（2002）に従い、2009年5月と9月に以下のような手順でPAC分析を実施した。日本語非母語話者であることを考慮して、協力者本人に通訳を希望するかどうか事前に確認し、希望がある場合は通訳をつけた。（通訳使用状況や調査に要した時間は表1参照のこと。）

表1 調査の実施者・所要時間・辞書と通訳使用状況

協力者	A		B	
	2009年5月	2009年9月	2009年5月	2009年9月
実施時期	2009年5月	2009年9月	2009年5月	2009年9月
インタビュアー	R1	R2	R1*	R1
通訳者	T1（タイ人）	T2（日本人）	T2	なし
連想語書き出し	1時間20分	55分	43分	25分
連想語の数	23	21	17	12
並べ替え	7分	12分	10分	3分
非類似度評定	33分	23分	15分	12分
インタビュー	2時間25分	1時間55分	1時間20分	1時間55分
連想語記入時の辞書使用	少し使用。 また、時々T1にも聞いていた。 R1にもこの日本語がわかるかと聞いてきたので適宜修正した。	なし ただし、R2に2度言葉の意味を確認した。	少し使用。	なし
通訳使用	話す時はほとんどタイ語。 聞く時もほとんどを通訳してもらっていた。	質問を通訳するよう頼むことはあまりなかった。 話す時は、答えを日本語で少し話し出し、タイ語にスイッチすることが多かった。	ほとんど日本語で話していた。T2には、一度言葉の確認をした他、何度かタイ語で「わかりますか」と尋ねていた。	なし

* 調査日程の関係で、非類似度評定のみT1が実施した。

- ①以下の刺激文（日本語）を提示し、自由連想で言葉をカードに書き出してもらった。連想語記入の際は、辞書の使用も可とした。なお、刺激文は、単に授業中の教師の態度・行動や、そこに反映される知識について尋ねるだけでなく、授業外の学習者への配慮や同僚との関わりなども含め、幅広く様々な側面を想起してもらうことを意図して作成したものである。

あなたにとって「いいタイ人日本語教師」とはどんな教師ですか。その教師は教室内外でどんな振る舞いをすると思いますか。また、あなたは、その教師に対してどんな気持ちを持つでしょうか。それから、その教師は日本語教育についてどんなことを考えていると思いますか。そういったことを含めてあなたが「いい日本語教師」という言葉を聞いて思い浮かべるキーワードやイメージを自由に書いてください。

キーワードやイメージは、できるだけ単語で、書いてください。ただし、それが難しい場合はもう少し長く（10字前後ぐらいまで）なっても構いません。

- ②①の連想語を重要だと感じる順に並べかえ、番号を記入してもらった。
- ③連想語同士が直感的なイメージでどの程度近いかを「1. かなり近い」から「7. かなり遠い」の7段階で評定してもらった。評定は全ての項目間で1回のみ行なった。
- ④③の評定の結果得た非類似度行列⁽⁴⁾をHALBAU7でクラスター分析（平方距離、ウォード法）にかけ、デンドログラムを作成した。
- ⑤④で作成したデンドログラムを協力者に示し、解釈を尋ねるインタビューを実施した。例としてBの9月のデンドログラムを図1に挙げる。なお、インタビュアーは内藤他（2010）で紹介された内藤のインタビューの進め方のように徹底して協力者の発話を反復するという形は取っていない。しかし、できるだけ協力者の思考に寄り添い、協力者主導でインタビューが進むように心がけた。また、協力者がイメージを喚起したり、その結果を日本語で表現したりしやすくなるように配慮した語り方を工夫した。
- ⑥各連想語のイメージをプラス（+）、マイナス（-）、どちらでもない（0）で答えてもらった。

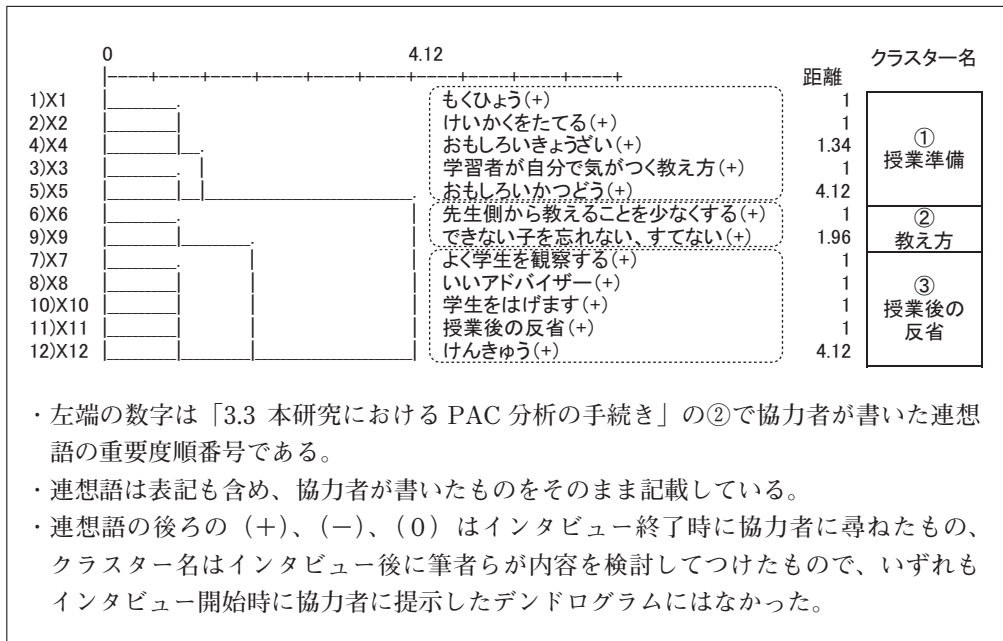


図 1 教師 B のデンドログラム (2009 年 9 月)

4. 分析結果

3.1 節に挙げた観点からデータを分析した結果、① PAC 分析独特のインタビューの進め方、② インタビュアーの発話、③ 通訳者の存在、の 3 点が協力者の語りに関わっていることが観察された。また、④ 協力者の語りをどのように解釈するかについて協力者が母語を使用した場合よりも配慮が必要であることが確認できた。本節ではこの 4 点についてデータを示しつつ論じたい。

4.1. PAC 分析独特のインタビューの進め方

協力者 A は 9 月の調査では各クラスター (以下、CL) について多くのイメージを喚起しているが、その原因の一つとして、PAC 分析独特のインタビューの進め方に慣れたということも関与している可能性が考えられる⁽⁵⁾。A と B の語りをみると、両名ともインタビューがどのような構成で進むかは早い段階で把握できたようである。例えば B は 5 月の調査において CL3 全体について語るように求められた際に、即座に「B: イメージは、うーん、色は (20 秒沈黙) 色は (15 秒沈黙) 水色です。(R1: 水色) 水色です、はい。場所は、やっぱり研究、研究室、です。はい。この段階の、あの一、名前はたぶん、改善、です。改善。改善。」⁽⁶⁾ と答えており、各 CL についてイメージ (色や場所) の他に最終的に名付けも求められていることを理解していることが見て取れる。述べた事柄についてなぜそう思うか理由を問われることがわかっていて、先取りして理由まで述べるのがインタビュー後半になって多くなったことも観察された。

但し、B はインタビュアーの問いかけに対して即座に自分の考えを述べると「それら

いです」「以上です」などと言って切り上げてしまい、「他にありませんか」と聞かれても、あまり考え込む様子もなく「ありません」と言って終わってしまうこともあった。PAC分析独特のインタビューの進め方について慣れているほうが戸惑わなくていいのは事実だが、場合によっては、それが深く考えを巡らせることなく表層的に回答することを助長してしまう可能性も否定できない。そのような兆候を認めた場合に、インタビュアーが協力者に対してどのように内面探索を促し得るかということが課題となるだろう。

このことにも関連して、2節で述べたように、インタビュアーが十分に協力者に思考をめぐらせる時間を与えることがPAC分析では重要であるということが、今回のタイ人新人NNTについても確認された。Aはインタビューの前段階で連想語を書き出してもらった時にも23項目を書き出すのに1時間20分もかけるなど、非常に時間を使ってじっくり考えている様子が観察されている。インタビューでも5月のインタビューが始まってすぐの段階で、まずCL1全体について語るように求められた際に、「青」「学校のグラウンドで遊んでいる子ども達を見ている先生」をイメージしているが、さらに何が思い浮かぶか尋ねられて、それぞれ1分ほどの沈黙を挟んでから、けがをした学生のめんどろを見ていた教師、個別指導したり学生の喧嘩を止めたり欠席した学生の家を訪問する教師のイメージを挙げた。このように、インタビュアーが非常にゆったりとAの発話を待つ姿勢は、Aの場合には有効であったようだ。

R1：何でも、こここの、ここの中から出てくるイメージ、何でもいいです。場所とか色じゃなくても、何でもいいです。

A：(1分35秒沈黙) (タイ語3秒)

T1：あの、けがをした学生を、めんどろ見ている先生

A：(25秒沈黙) チューターがしている。

R1：チューター↑

A：チューター

R1：をしている先生。

A：はい…。

R1：チューターというのは、先生1人、学生1人、ですか↑

A：はい。(1分沈黙) (タイ語10秒) (1分10秒沈黙) けんかしている学生。

<中略>

R1：はい、じゃあ、今、いろいろイメージを言ってもらいましたが、このグループに、名前をつけてください。

A：(20秒) 親切。親切。

4.2. インタビュアーの発話

会話のやりとりを分析してみると、インタビュアーが以下のような2つの語り方で、協力者の内面探索を促そうとしていることが見て取れた。

4.2.1. インタビュアーが理解しているか確認すると共にさらに協力者自身の言葉による説明を促すための問いかけ

協力者の語りがわかりにくい場合、インタビュアーは「～とは？」とさらに説明するよ

う促すなどの働きかけをしたり、「それは～ということですか?」と協力者にインタビュアーの理解が正しいかどうかの確認を求めている。例えばAの5月のインタビューでは次のようなやりとりがある。

A：(1分20秒沈黙)(タイ語35秒)

T1：あの一、このグループ、3つ目のグループは、要素が1つしかないです。まあ、先生だけです。で、2つ目は、あの一、いろいろな要素が入っています。で、先生、も、学生もいます。それから、学生も、あの一、いろんな学生がいます。例えば、あの一、その学生、あの一、学生、わからなかったら、え一、ま、いろいろ、げん、原因はいろいろあります。その、あの一、学生の背景とか、あの一、先生の説明とか、にも、あの一、関係があるそうです。

A：(タイ語6秒)

R1：学生の背景というのは↑

A：(タイ語13秒)

T1：例えば、地方の学生とか、バンコクの学生

A：(タイ語6秒)

T1：ま、1つの教授法を、あの一、わ、よくわかる学生もいるし、わかんない学生もいるということです。

特に色や場所などのイメージが語られた場合には、その色や場所などが協力者にとってどのような意味を持つイメージであるかをできるだけ協力者自身に語らせようとしている。例としてBに対する9月の調査で、CL2についてのイメージを聞き取っている箇所を挙げる。

R1：じゃ、この2つの、この、2つ目のグループのイメージはどうですか↑

B：イメージ、ですか↑

R1：うん。

B：もう色といえば、(R1：うん) あの一、青、ですね、先生。

R1：青。

B：み、緑、信号の青みたいです。

R1：あ一。

B：あの一、はい、なんか。

R1：どうしてですか↑

B：なんか、アクションの、ことです。実際にすることです。

R1：はい。

B：はい、あの一、さっきあの一、赤、赤のほうはあの一、準備、(R1：はい) ですね。あの一、この段階は、あの一、実際にすること。

R1：あ一。

B：はい。(笑)

R1：実際にすることは青のイメージなんですか↑

B：青のイメージ。(笑)

R1：(笑) 信号と関係があるんですか↑

B：はい。

R1：それは、関係がある。

B: はい、信号、はい、信号の関係、あの、まあ、うーん、もしあの、青になったら、あの、車があの一、(R1: あーはいはい) 走り、あの、走り始めますね、先生。

R1: はい。

B: はい。これ、あの、さっき、あの、赤のほうは学生がなんかゆっくりゆっくり準備して、(R1: はい) でも、あの、赤はあの一、なんか学生が、なん、なんか車、例えたら、なんか、がく、教師を、車と、(R1: うん) あの、例えて、なんか、赤のほう、(R1: うんうんうん) なんか、車が止まって、でも、(R1: うん) 青になったら、あの一、せん、教師がもう、(R1: うん) なんか車が教室に入って、(R1: あー) 実際にあのなんか走る、(R1: はいはいはい) みたいな感じ。

R1: じゃ、赤の時は、車が、教師である車が、止まって、そこで準備している。

B: 止ま、準備、そうです。

ここではBが「青」「緑、信号の青みたい」だと答えたので、インタビュアーは「どうしてですか↑」という言葉でなぜそれをイメージしたのかを説明するようBを促している。その際にインタビュアーはBがより詳しくイメージについて説明できるように少しずつ言葉を添えているのだが、語りから推測されることを含めて大きなまとまりとして表現し直してBに確認を求めるという形ではなく、必要最小限の問いをすることで補足説明を求めていることが見て取れる。まずは、Bが述べた「実際にすること」という一言を捉えて「実際にすることは青のイメージなんですか↑」と聞き、その答えが「青のイメージ。(笑)」だけであったので、その前にBが述べていた信号に言及して「(笑) 信号と関係があるんですか↑」と尋ねている。それでもBが「はい。」としか答えなかったので、「それは、関係がある。」と質問を重ねた。ここでようやくBからまとまった長さの語りによる説明がなされている。そしてインタビュアーは、Bに確認を求めるとともにBの語ったことを短くまとめて「じゃ、赤の時は、車が、教師である車が、止まって、そこで準備している。」と言い直し、Bも「そうです」と応じているのである。

なお、この直前の場面のインタビュアーの問いかけ方にも着目したい。ここではインタビュアーはCL2全体についてBに語るよう仕向ける問いかけをしており、まずは、「じゃ、これ、この2つはどういうまとまりですか↑」と質問したのみで発話のターンを協力者に渡している。それに対するBの反応は、言葉数は多かったもののCL2全体についてイメージした語りではないように見えるものであったため、インタビュアーは2項目が同じグループに入っていることに言及し、各項目それぞれではなくて「その2つの項目の関係は、どうですか↑」と、グループ全体のイメージを引きだそうとしている。このように、インタビュアーは自らの質問の意図が協力者に伝わるように、言葉を換えて繰り返し問いかけを行っている。しかし、その際に一つ一つの項目についてであると思われる語りについても協力者の語りをさえぎることはしていない。ここには、PAC分析の手続きに則って協力者の内面探索を促そうとする一方で、できるだけ協力者の主体的な語りを尊重しようとしているインタビュアーの姿勢が現れていると考えられる。

4.2.2. きっかけや個人的エピソードを想起させる問いかけ

インタビュアーは、協力者が様々なイメージを喚起して内面探索した語りを終え、これ以上思い浮かぶことはないと言った後に、協力者がそう思うようになったきっかけや具体

的なエピソードはないかと尋ねたりもしている。

例えば9月の調査で、BがCL1全体について、教師が真剣に一生懸命準備することが大切であること、そうしないと授業がスムーズに進まないこと、教師が図書館で活発に準備をしているイメージが思い浮かぶが、あとはもう他にないと述べた後に「R1：もうないですか↑（笑）そうですか。じゃあ、そういうことを、まあ、こ、これが、あの一、大切だなーと思うようになったきっかけとかはありますか↑」という形で具体的エピソードについて語るよう促している。その問いかけは、Bが以前、授業前に時間がなくなることからちゃんと準備せずに教室に入ったことがあり、その時に学生にわからないと言われた経験があること、それは学生の実ミスではなくて自分のミスだと思っており、その後は気をつけようと考えようになったのだという語りを引き出すことにつながった。

4.3. 通訳者の存在

本調査では協力者の希望に応じて通訳者を同席させたため、5月はAとBの両名に、9月はAのみに通訳者を同席させることになった。

Bは5月のインタビューにおいてもほとんど通訳者を介することなく自ら日本語のみで話していたが、日本語で話しながらも時々、通訳者の顔を見て確認している様子が見られた。インタビュー後にBに緊張していたのかと尋ねた際に、自分の日本語をインタビュアーがちゃんとわかっているか心配だったと語っており、インタビューに答えている時に通訳者の表情に理解の表出が見られることによって安心感を得ていたのだと考えられる。このような、協力者にとって初めてのPAC分析で、PAC分析がどのようなものか、どの程度の日本語力で対応できるものかがわからない場合には特に、通訳者をおくことで得られる安心感は重要であると考えられる。

一方、Aは2回とも通訳を使用し、インタビュアーの話す日本語に関しては、自分の理解に自信がない場合のみ通訳者に通訳を促したが、A自身が語る際は短い簡単なやり取り以外、ほぼ通訳者を介して行われた。結果としてAとインタビュアーのやり取りはスムーズに行われたようであったが、Aのタイ語による発話とその通訳内容を、後日、他の通訳者に依頼して内容を確認してもらったところ、Aの発話内容が十分にインタビュアーには伝わっていなかったと考えられる箇所があった。

例えばAは5月にCL1のイメージを尋ねられて「性格」と答えたのだが、それだけではよくわからないのでインタビュアーは「性格。誰の性格ですか↑」と質問している。それに対する回答はタイ語で寄せられ、通訳者は「先生の、せい、性格」と訳したのだが、後日、別の通訳者に確認したところ、タイ語に忠実に訳すと「授業見学に来た先生の」であることがわかった。この後に続くやり取りの中では授業見学に来た教師について語られていないので、教師一般について、あるいはAが理想とする教師について「先生」と言及しているように見え、なぜ「授業見学」ということに言及しているのかはよくわからなくなってしまう。

この他に、インタビュー当日の通訳では細かなところまで訳し切れていないと感じられる箇所もあった。例えば9月の調査においてAが「いい先生」について説明している箇所は、インタビュー時には以下のように通訳されている。

T1：日本、のあったこと、と、日本語を、よく理解している。学生の日本語の学習問題、

と、それからそれ以外の問題について理解している。そしてそれらの問題を解決することができる。あの、さっき日本語がわかることって言ったんですけど、それがわかって、だから、わかりやすい説明ができる、そしていろんな教材を使ったりアクティビティをして、学生たちがもっとわかりやすく勉強でき、て、興味を高められる。学生たちの興味を引き出すことができる。

しかし、後日確認したところ、タイ語に忠実に訳すと A が述べていたのは次のような内容であることがわかった。

後日訳：日本の言葉や国について理解している。学生の日本学習や身の回りのことについて理解している。さっき、日本語を理解していることと言ったのですが、やさしく説明できること（もありますが）、やさしく説明するには、活動をやったり、いろいろな教材を使ったりします。そうすることによって、学生が理解しやすくなり、学生が勉強したいと言う気持ちを引き出します。

両者の下線部分を見ると、A が様々な活動や教材を使うことが内容をやさしく説明することと関係があると考えていることがインタビュアーには十分伝わっていなかったことになる。しかし、この箇所がないと、A が様々な活動や教材を使うことが内容をやさしく説明することと関係があると考えていることがインタビュアー側には伝わらなくなってしまう。

このようなことを回避するためには、調査後に通訳された箇所について再度訳して確認することが重要なのももちろんだが、通訳者に事前に調査の意図を伝えて、できるだけ原語に近い表現に訳してもらうようにし、意図が伝わりにくい場合を除いて必要以上の意識をしないように指示することが必要だろう⁽⁷⁾。

4.4. 表現の解釈

通訳をつけずにインタビューを行った場合、日本語で流暢に語っているように見えても、実は念頭にあることがどれだけ本当に自分が言いたいことに近い形で語られているのかはインタビュアーには判断がつかない。特殊な言葉遣いを用いた場合も、意図的にそのような用語を選んで話しているのか、母語の転用など日本語母語話者ではないことに起因するのかはわからない。例えば、B は 5 月のインタビューにおいて「幸せに日本語を学べる教室、学べる授業を作りたい」と言っており、別の箇所でも「幸せに勉強できない」と述べているが、この「幸せに学べる」という言及について本人が考えている状況とインタビュアーが受け止める感覚が異なっている可能性は否定できない⁽⁸⁾。

語りの分析では、特徴的な言葉遣いを捉えて考察を深めるというやり方がしばしばなされるが、NNT の語りを考察する際には、特に留意して、自分たちの解釈の妥当性を再検討する姿勢が必要であろう。

また、単語レベルでの言葉の解釈に留まらず、NNT の語りが意味するところをよりよく理解するためには、その国の社会的背景や教育制度など、協力者の置かれた文脈もきちんと理解しておく必要があるだろう。

5. 結論と本研究からの示唆

本稿では日本語が母語ではない協力者を対象とした PAC 分析について、インタビューの仕方に焦点をあてて考察した。4 節で指摘したことを踏まえると、外国語である日本語

でPAC分析を実施する際の留意点は次の4点となるだろう。

まず、PAC分析独特のインタビューの進み方に対する戸惑いを軽減する必要性がある一方で、そのことが表層的な内面探索に終わらないようにインタビュアーは留意すべきである。その際、協力者に、思考をめぐらせるのに十分な時間を与えたり、色や場所などを使ってイメージを想起させたり、個々のクラスターをクラスター全体としてイメージさせたりするというPAC分析の特徴を十分活かすように協力者に問いかけることが重要であろう。過去の具体的な体験などのエピソードを想起させることも有効だと考えられる。

次に、インタビュアーは、協力者が主体的に発話するのを妨げないようにしつつ、協力者の意味するところを十分に理解するために、協力者自身にどのような意味で語っているのかを説明するよう促すことが大切である。

さらに、通訳者の存在そのものが、協力者に安心感を与え、語りやすい環境づくりに貢献する可能性があることを調査者（インタビュアーを含む）は認識すべきであろう。但し、通訳者には事前に調査の意図を伝えて、その意図が協力者に伝わりにくい場合を除いて必要以上の意識をせず、できるだけ原語に近い表現に訳すよう指示すべきである。また、通訳された部分を別の通訳者によって後日確認する必要がある。

最後に、協力者が日本語で語った言葉を解釈する際に、調査者は、特殊な言い回しの背後に母語の影響がないか確認したり、協力者の置かれた社会的文脈も理解して解釈したりすることが大切である。

本研究は、インタビュアーや通訳者がどのようにインタビュー場面に臨んだかということが、協力者の語りのありようや、調査者による協力者の語りの解釈に影響を与えていることを明らかにした。今回は分析することができなかったが、通訳者がどのように質問をしたかという部分も別の通訳者によって確認するなどして、それがどのようにインタビューに影響を与えたのかを考察する必要があると言えるだろう。PAC分析では調査者はできるだけ協力者の発話を引き出すことに専念し、自らの語りを控えることになっているために、協力者の語りのみが分析対象になりがちである。本研究の成果は、PAC分析であっても、インタビューの構成員全員の発話を分析の対象にする必要性を示唆したと言える。このことは、非母語話者を対象にして外国語で実施したPAC分析に限らず、PAC分析を活用する者全員が念頭におくべきことだと言えよう。

注

- (1) 初回は英単語使用が8回、中国語による説明が6回、うち1回は長い説明である。二回目は英単語使用が1回、筆談も含む中国語使用が3回だった。
- (2) 3名は来日直後のアメリカ国籍の学生である。うち1名は中国系であるが、英語で教育を受けてきており、中国語話者と中国語でコミュニケーションを図ることは困難な中国語力であった。
- (3) 調査時の研究目的が、研修への参加との関係を分析することであったため、教授歴が短く、それまでの研修受講経験も限られる新人のほうが研修の影響や成果が見やすいと考え、新人を対象とした。なお、筆者らの一連の研究では、調査開始時点で日本語教師歴が1年未満の者を新人としている。
- (4) 本来は非類似度行列を提示すべきだが、本稿では紙幅の都合から省略した。

- (5) 2名とも2回目の調査で発話量が増えている。本調査のデータからは特定できないが、①日本語能力の向上、②PAC分析への慣れ、③想起される内容が豊かになるような協力者自身の変化、④調査者の違い、⑤Aの場合には通訳者の違いなどが影響を与えた可能性が考えられる。④⑤については、調査者や通訳者とNNT（協力者）との人間関係などが影響を与える可能性が考えられる。例えば、互いによく知っている人なのか、教師と生徒／学生、上司と部下、先輩と後輩のような関係なのか、初めて会う人なのかなどがインタビューでの語りに影響を及ぼす可能性は否定できない。
- (6) 発言者を示すアルファベットは表1で使用したのと同じである。（ ）内は筆者らによる補足である。本調査では、通訳部分をインタビュー後に別の通訳者に確認してもらっているが、Aの発話がよりよくわかる場合に限り、[]で別の通訳者の訳を併記した。
- (7) 通訳者としてインタビューに同席した者は2名とも日本語・タイ語の両言語に精通しており、日本語教育そのものについても、タイの日本語教育事情についてもよく理解している人物であった。そのような通訳者でもこのようなことが起こったことから、通訳者には調査の意図や訳し方に関する要望等をさらに詳しく説明しておく必要があったと筆者らは考えている。
- (8) タイ人母語話者に確認したところ、「幸せに学ぶ」はタイ語の直訳的表現で、日本語としては「楽しく学ぶ」に近い意味で用いられたのではないかという指摘を受けている。

*本研究は、平成21-24年度科学研究費補助金（基盤研究（C）「量的・質的ピリーフ研究から海外ノンネイティブ日本語教師の研修に必要なものを探る」（研究代表者：坪根由香里、課題番号21520549）の取り組みの一部である。

参考文献

- 安龍洙・渡辺文夫・内藤哲雄（2004）「日本語学習者と日本人日本語教師の授業の比較—個人別態度構造分析法（PAC）による事例研究—」『茨城大学留学生センター紀要』2、49-59.
- 井上孝代・伊藤武彦（1997）「異文化間カウンセリングにおけるPAC分析」、井上孝代（編著）『異文化間臨床心理学序説』多賀出版、103-137.
- 高野陽太郎（2002）「外国語を使うとき：思考力の一時的な低下」海保博・柏崎秀子（編）『日本語教育のための心理学』新曜社、15-28.
- 坪根由香里・八田直美（2009）「ノンネイティブ日本語教師に対する『いい日本語教師』に関するPAC分析—その結果およびPAC分析使用の意義と留意点—」『言語文化と日本語教育』38号（第38回日本言語文化学会ポスター発表要旨）、お茶の水女子大学日本言語文化学会、85-88.
- 坪根由香里・嶽肩志江・八田直美・小澤伊久美（2010）「PAC分析によるタイ人新人・経験日本語教師の『いい日本語教師』像の比較」『2010世界日語教育大会予稿集』
- 内藤哲雄（2002）『PAC分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄・能智正博・丸山千歌・小澤伊久美（2010）「PAC分析のデータを実施者・被検者・

- 第三者が共に語り合うデータセッション」(小澤伊久美・丸山千歌企画)、『PAC 分析学会第4回研究大会発表抄録集』、10-28.
- 八田直美・小澤伊久美・坪根由香里・嶽肩志江(2011)「PAC 分析と質問紙によるタイ人新人日本語教師のピリーフ調査—ノンネイティブ新人教師にとっての研修の意義を考えるために—」『第20回小出記念日本語教育研究会予稿集』、41-44.
- 八田直美・小澤伊久美・嶽肩志江・坪根由香里(2012)「ノンネイティブ新人日本語教師にとっての研修の意義—PAC 分析によるタイ人新人日本語教師のピリーフ調査から—」『国際交流基金日本語教育紀要』8、23-39.
- 藤田裕子(2007)「日本人学生とのやり取りを通じた作文授業の影響—PAC 分析による学習者理解」*JALT Journal*、29 (1)、81-97.
- 丸山千歌・小澤伊久美(2011)「ステレオタイプのな読解教材に学習者の留学経験はいかに反応するか—日本語学習者に対する PAC 分析法による縦断的研究からの示唆—」徐敏民(編)『日語学研究』華東師範大学出版社、203-213.
- 横林宙世(2005)「日本語力の低い留学生に対しての面接調査—PAC 分析の有効性」河原崎幹夫先生古希記念論文集実行委員会(編)『教師づくり教材づくり日本語教育』凡人社、71-82.

What We Should Know When Conducting PAC Analysis in Japanese to Non-Native Speakers of Japanese: Suggestions from a Survey of Thai Novice Japanese-Language Teachers by PAC Analysis

Ikumi OZAWA · Yukie TAKEGATA · Yukari TSUBONE · Naomi HATTA

This paper analyzed the survey of two Thai novice Japanese-language teachers by Personal Attitude Construct (PAC) analysis, and discussed what we should know when conducting PAC analysis using a foreign language with the participants.

The survey was conducted in Japanese, but participants were allowed to ask an interpreter to join. The researchers investigated whether those teachers' responses were influenced by the interviewer's and the interpreter's way of talking, and if they were, how they were influenced.

As a result, this survey found out that:

1. those teachers' responses were influenced by the speed at which the interview proceeded, the way they were questioned, as well as the presence of the interpreter;
2. (the interpreter's) interpretation sometimes differed from what participants exactly said and this might have misled the researcher to an invalid analysis.

The data taken using PAC analysis has been usually focused on only the participants' utterances. However, findings of this survey indicate that even in PAC analysis, researchers should consider how the interviewer and the interpreter talk to the participants when interpreting the interview data.